▲△△　濃霧に巻かれた氷河の上で　▲△▲

～「モンブラン／ヴァレ・ブランシュ氷河登下降」敗退記～

大塚 忠彦

◎山行日：2019 年 8 月 5, 6 日　　◎メンバー：大塚、会員外学（岳）友との 2 人パーティー（個人手配、ガイドレス）

遥か頭上を通り過ぎて行く３連のパノラマ・テレキャビンのゴンドラを恨めしそうに見上げながら、さて、どうしたものかと思い悩んでいた。昔唄った山の唄、♪♪行こうか戻ろか南稜テラス、戻りゃ俺らの心がすたる、行けばあの娘が涙を流す、山の男はつらいもの、ドコズンドコ ズンドコ♪♪（谷川小唄）の心境。
アラウンド・エイティーのロートルに“涙を流すあの娘”が居る筈も無いが、“戻りゃ俺らの心がすたる”というさもしい貧乏根性に邪魔されて心が乱れているのであった。

（恨めしそうに見上げたゴンドラ。画面中央の３ツの罌粟粒）

また、翌朝の地元紙に「無謀な日本人老人２人、モンブラン氷河クレバスに墜落凍死」というタイトルが躍っているのが頭の隅をよぎった。

ここは、フランス・シャモニーの街からロープウェイで一気に標高差 3 千㍍弱登った展望台に聳える針峰エギュ・ドュ・ミディ（標高 3,842m）からメール・ド・グラス氷河に繋がるヴァレ・ブランシュ氷河を２時間ほど下っていよいよ巨大なクレバス地帯に突入するという氷河上の途上の地点であった。

出発点のエギュ・ドュ・ミディで 2 時間ほど強風とガスの天気待ちをしていた関係で、ここに到着した時は既に正午近くになっていた。この先、目標終着点のイタリア側のエルブロンネル（標高約 3,500m）までは時間的には 4 時間くらいで辿り着けると思うが、クレバスの通過でモタモタしたりするとエルブロンネルからエギュ・ドュ・ミディに戻ってくるゴンドラの終発に間にあわず、逆方向のイタリア側に降るにしてもテレフェリークの終発に間に合わない可能性が高く、標高 3,500m の雪の稜線でビヴァークを強いられることになり、我が体力ではアッと言う間にマリア様のお住まいになる西方の六道の闇夜に行ってしまうだろう。エルブロンネルの付近にはトリノ小屋という営業小屋もあるが、そこまで明るい内に辿り着けるかどうかも自信が無い。

氷河上を覆っている濃霧が時々晴れてくれれば、ルートの方向や先蹤者のトレースも視認できるし、従ってクレバスも避けられるが、ヤバイことにガスの切れ目が段々と無くなってきてホワイトアウトの様相になってきた。今までは、頭上にボンヤリとではあるが見えていた３連のパノラマ・テレキャビンの姿も全く見えなくなった。この調子では闇夜に投げ出された鳥眼と同じでヒドゥン・クレバスを踏み抜いて前述の新聞記事で叩かれるのがオチであろう。

私はガイドレス主義であるから今回も昔の岳友とのガイドレスの 2 人パーティーであった。このヴァレ・ブランシュ氷河は広大な上に、縦横にヒドン・クレバスが走っているので、必ずガイド付にするように、またどうしてもガイドレスであれば、ガイドパーティーを掴まえて常にその後を離れずにそのトレースを忠実に追うようにとの先人のアドバイスを頂戴していたので、今回も信用できそうなガイドパーティーの直ぐ後を歩くようにしていたのであるが、何とこの場に及んで、そのパーティーのガイドが「この先ガスが一層濃くなるようだ。我々はコスミック小屋に戻る。Have a nice day.」と言ってさっさと踵を翻して戻って行った。

（トレースの直ぐ横に大きなクレバスが・・）

我々はこの時点で“シェパード”（先導犬）を失った。僅かなガスの晴れ間に行く手を見渡すと、はるか前方のクレバス地帯に豆粒のような 2 人パーティーが見えるだけで、前にも後にも人間は誰も居なかった。行けるかもしれないし行けないかもしれない、此処が思案の思案橋。

この続きは後述するとして、今回この氷河の登下降を計画した経緯から話を始めたい。

前ページ冒頭に掲げた写真をご覧頂きたい。上述のエギュ・ドュ・ミディはシャモニーの絶好の展望台でもあり、またモンブランやモンブラン・ドュ・タキュルなどに登攀する登山口でもあるので、訪れた方も多いと思う。この冒頭の写真はそのエギュ・ドュ・ミディ展望台を源頭として流れ出しているヴァレ・ブランシュ氷河の下流方面を眺めたもので、右奥の高い雪峰がモンブラン頂上、その左側手前の大きな岩塊がモンブラン・ド・タキュル、雪の稜線を左に辿った左端の岩稜がクライミングで有名なグランド・ジョラスである。この雪稜のコル付近に見える▲型の小岩峰が今回の氷河登下降の終点であるイタリア側のエルブロンネル（標高約 3,500m）である。この雪稜が国境で、雪稜の手前がフランス、向こう側はイタリアという寸法。この写真が撮影されたエギュ・ドュ・ミディ展望台は手前にある。

この▲の右下の氷河がこんもりと盛り上がっている凸凹状（これは巨大なクレバス）の部分が見えるが、ここの手前が“行こか、戻ろか？“と逡巡していた地点である。**（因みにこの写真は今回我々が撮影したものではなく、他日の快晴時にどこかの誰かが撮影した物を現地の HP から引用したものであり、以降も同様な引用写真には※を付して区別した。撮影者に感謝します）。**

以上、カタカナの地名ばかりが出てきて、シャモニーに行ったことが無い方には煩瑣であったと思うが、以降もコースの説明などに登場する山名なのでお許し願いたい。

さて、本論に戻ろう。

5 年前に同じ山の会の Aka、Saka、Kawa の諸氏と 4 人でモンブラン・ドュ・タキュルに登りに行った

際に（実際には直前に降った大雪で雪崩のリスクが増大し入山禁止、替わりに少し低いラシュナル峰登攀に切り替え）、このヴァレ・ブランシュ氷河上部を 1/5 ほど往復したことがあったが、その折にエギュ・ドュ・ミディから眺めた冒頭のような雄大な景色が忘れられず、この氷河登下降は標準タイム 4～6 時間でロープウェイの下駅エルブロンネルまで辿り着けるらしいので、体力が減退した終末高齢期の“これが最後です”の山に取っておこうと密かに温めていた山であった。

ただ問題は、この氷河下流部は広い上に巨大なクレバスが縦横無尽に走っていて、標識などは全く無く（日々流動している氷河であるから当然のことであるが）、ホイワイトアウトになれば正しいルートを見失ってクレバスに墜落というリスクが大きく、ほぼ全てのパーティーがガイド山行であり、また墜落防止のためにアンザイレンで歩くのが当たり前というものであった。前者についてはガイドレス主義の小生はその意思は初めから無く、後者のアンザイレンは単独行では不可能であるが、これは、ロープワークには不慣れであるが学生時代の学友（岳友）を口説いて富士山の雪渓で事前訓練し、最低限の氷河ロープワークを習得して貰ってロープを結ぶこととした。

実際の話、我々ロートルはクレバスに墜ち込めばセルフレスキューなどを行う体力はとうの昔に返上してしまっているのであるが、暫くの間だけでもクレバスに墜落した相棒を停止・確保したままの姿勢で頑張って、後続ガイドパーティーの救助を待つという僥倖があるかもしれないではないか。

さて、話を本日の初っ端に戻そう。昨日、シャモニーの山岳情報センターで確認したところでは、このところ午後からは天候が崩れているので、朝始発のロープウェイで登って、なるべく早い時刻に氷河を渡り終えるようにとのアドバイスがあった。また、エギュ・ドュ・ミディから氷河への下りの馬の背が朝のラッシュで混むので、ここも出来れば一番乗りで下るようにしないととんでもない待ち時間を喰らうとの注意もあった。

という次第で、朝 5 時前ロープウェイ下駅に一番乗りで待機。お蔭で 6:30 始発のロープウェイで 7 時にはエギュ・ドュ・ミディに到着。なるほど、山岳情報センターのガイドが言うように、エギュ・ドュ・ミディの馬の背下り口トンネルはハーネスを付けたりロープを結んだりしている沢山のガイド登山パーティーで大混雑していて、立錐の余地も無かった（その殆どはモンブランやモンブラン・ドュ・タキュル登攀組）。おまけに全員が強風と濃霧待ちをしているので、混雑は増えるばかりである。吹き上げる風と濃霧が多少緩んで来てガイドパーティーは順次出発して行ったが、馬の背は未だ耐風姿勢を取らなければならないような状況であったので、我々ロートルはもう少し待ってアンザイレンしコンテで下ったが、馬の背は未だカチカチに凍結していて、アイゼンの歯でも滑らそうものなら、一気に千尋の谷に滑落、シャモニーの町まで一足飛びという塩梅でスタカットで下りたかったのであるが、後には順番待ちのパーティーがつかえていて、悠長なスタカットなどをやらせて頂ける状況ではなかった。

馬の背を下りきると平坦なプラトーがあって（上の写真の左下の手前に飛び出した箇所）やや安心したが、その下はまたまた凍結した急斜面になっていて緊張した。やがて、右手にエギュ・ドュ・ミディの大岩壁やコスミック小屋が見えるようになると、雪面も緩やかになってのんびりと歩けるようになるのであるが、小さいながらヒドゥン・クレバスが縦横に走っているので気が抜けない。

後から下って来る何組かのパーティーに道を譲り、また下から登って来るパーティー（これはエルブロンネルのトリノ小屋を早立ちしたパーティー）と交差している内に段々と空模様が怪しくなり、湧いたガスがヴァレ・ブランシュ氷河を昇って来て全体を覆うようになってきた。やがて遥か頭上を走っているパノラマ・ゴンドラの姿も全く見えなくなった。前方にはガスの切れ目から巨大なクレバス帯が牙を剥いているのが望見できた。そこに、我等が“シェパード”氏のリタイア宣言が降って湧いたという訳である。少しでもガスが薄くならないかと暫時待機してみたが、天候の大勢は逆の方向に傾いているようだった。前述の新聞の遭難記事が頭をよぎるようでは、これは精神が退嬰的になっている証拠であり、この調子ではこの先ロクなことがないと判断して、残念ではあるが我々もここでリタイアすることにした。

思えば、今年の正月頃から真面目に検討を開始して、３月末には飛行機やホテルの手配も完了し、このコースの下調べや、２万５千図上でのルート同定、山行記録の参照など現地の HP に当れるだけ当って英語やフランス語に頭を悩ませつつ登攀資料だけでも 50 頁超の資料を作成して準備した割には、あっけない結末となった。

先程まで勇躍して下って来たエギュ・ドュ・ミディに登り返す足は重くて進まなかった。２時間で降って来たコースを戻るのに５時間近く掛った。最後の馬の背は夕方を迎えて再びカチカチに凍結、喘ぎ喘ぎながらやっと登ったが、足がフラフラして滑落しそうになった。

アンザイレンしているので、どちらか一方が滑落すれば２人とも数珠繋ぎでマリア様のお招きに与ることになろう。

相棒をスタンディング・アックス・ビレーでスタカット確保したいが、雪面がカチカチでピッケルが全く入らなかった。スノーバーも持参していたが、これも打ち込むことができなかった。

シャモニーのホテルへ戻って、残念ビールを飲んだが、どうも落ち着かなかった。何かが吹っ切れていないのである。天気予報によれば、明日も今日と同様の予報である。しかし、明朝はひょっとすればマリア様が微笑まないとも限らないではないか？

ヨシッ、明日再度リベンジすべしと、今回少しでもフット・ギアの軽量化を図るべく新調した軽量化アイゼンの調子が悪かったので、閉店直前のスネル・スポーツに走ってちゃんとしたグリベルの 12 本爪をレンタルし翌

（イザッ、撤退！。左の岩稜は Gros Rognon、奥は Dent du Geant）

（エギュ・ドュ・ミディに登り返す脚が重い）

朝も朝一番乗りでエギュ・ドュ・ミディへ登って行った。しかしマリア様は微笑まなかった。

強風が昨日より一段と強くガスを巻き上げ、ヴァレ・ブランシュ氷河は全くの五里霧中、他のパーティーも殆どがハーネス&ロープを付けたままで待機、中には強風の中を出発するパーティーもあったが、下り口の馬の背では強風のために前向きで降ることができず、後ろ向きに正対で降る始末（下写真）。

我々もハーネスとロープを付けて１時間半ばかり待機してみたが、天候が回復する様子も無く、待機していた他のパーティーも引き上げ始めたので、今度はきれいさっぱりと諦めてシャモニーに戻った。

以上が恥ずかしながら今回の敗退ノ記であるが、途中まででではあるが２回の登下降の経験からこのコースの大体の様子が分かったので、これは是非リベンジしなければならないし、また、今回の経験から来年辺りなら未だ体力的にも何とかなって目標が達成できるのではないかと密かに再度のトライを目論んでいるところである。

２年前の腰椎骨折を始め、頸椎、脊椎の合計３箇所の背骨を骨折しているし、またこの２年間は殆ど山行と言えるほどのトレーニングも出来なかったので体力も激減の一途であるが、幸いなことに、このヴァレ・ブランシュ氷河ルートは、フランス側からイタリー側に越える方向であれば、出発地点のエギュ・ドュ・ミディからは標高差 650m の下り、コース上の氷河最低標高地点からエルブロンネルまでの標高差 300m を登り返さねばならないが、この登りは草臥れた脚には少しキツイかもしれないが、最初からキツイ登りの通常の登攀と較べれば、物の数ではないというメリットもあろう。

そのような訳で、もう、海外の高峰に登る体力は残っていないが、このようなルート設定であれば、小生の如き無力のロートルにも海外登山の道は開けるというものである。高峰に登らなくてもそれと同様な興趣が得られるコースは工夫次第で探し出せる。

例えば、このヴァレ・ブランシュ氷河の下降にしても、時間は相当掛かるがルートをメール・ド・グラス氷河に繋いで大迫力のドリュの壁を眺めながらモンタンヴェールへ下山する手も考えられよう。ロートルを自称する皆さんにも是非トライして頂きたい所以である。

末尾になったが、今後このコースを企画される方々のために若干の情報を記して本項を終わりたい。

（１）●本文でも書いたが、このコースの一番の問題点は濃霧によるロストポジション、及びクレバスへの墜落である。晴天で先蹤者のトレースが明確に辿れる場合にはガイドレスでも問題無いが、瞬時にホワイトアウトになる可能性もあるので、ガイド山行にするか、或いはガイドレスでも行けるかをご自分の技術力と併せて充分にご検討願いたい。

●天気予報にも要注意。街に掲示されている天気予報はシャモニーの町（麓）の天気予報であるから、できれば山岳情報センターなどで詳細な山の天気予報を聞いた方がよい。

●新雪が降った翌日はクレバスが隠されていること、大量の降雪の場合は雪崩の危険性もあることから、ガイドのトレースが固まるまで出発を延期すること。

（２）氷河上のアンザイレンについて

●氷河上のコンテのアンザイレン方式は、４人以上の場合には通常のストレートロープのアンザ

イレンでよいが、２～３人の小人数パーティーの場合にはメンバー間を繋いでいるロープにバタフライ・ノットでコブを作り、クレバスに墜ち込んだ場合に、クレバスの縁にそのコブが引っ掛かって滑落を停止できるアンザイレン方式を採用した方が相対的に安全である。

但し、この方法では、スタカット確保に切り替える場合に、バタフライ・ノットの間隔によってはバタフライ・ノットを一旦解除しなければならないという面倒がある。

●墜落のリスクがありそうなクレバスを渡る場合には、当然のことながらスタンディング・アックス・ビレーなどのスタカット確保が必要であることは言うまでもない。

（３）エギュ・ドュ・ミディ～エルブロンネル間の３連パノラマ・ゴンドラ（正式名称＝パノラミック モンブラン ケーブルカー）の終発時刻を確認しておくこと。また風が強い場合には運休になるので、運行情報も確認しておく必要がある。このゴンドラの運行情報は現地でも入手しにくい。

（４）エギュ・ドュ・ミディへのロープウェイは最盛期は混むので、朝一番（6:30 始発）に乗ること。

（５）ヴァレ・ブランシュ氷河は広大な氷河であるので、しっかりと先のルートを押さえておくことが不可欠。エルブロンネルは３連ゴンドラの終点であるから、ガスの晴れ間にゴンドラの走行方向をチェックして目標を確認しておきたい。

（６）レスキュー要請について。

シャモニー（フランス）での緊急救助要請は、１７（警察）である。ヴァレ・ブランシュ氷河から携帯が繋がるかどうかは確かめていないが、モンブラン山頂からなら携帯が繋がるそうであるから、シャモニーの山岳情報センターで確認した方がよい。

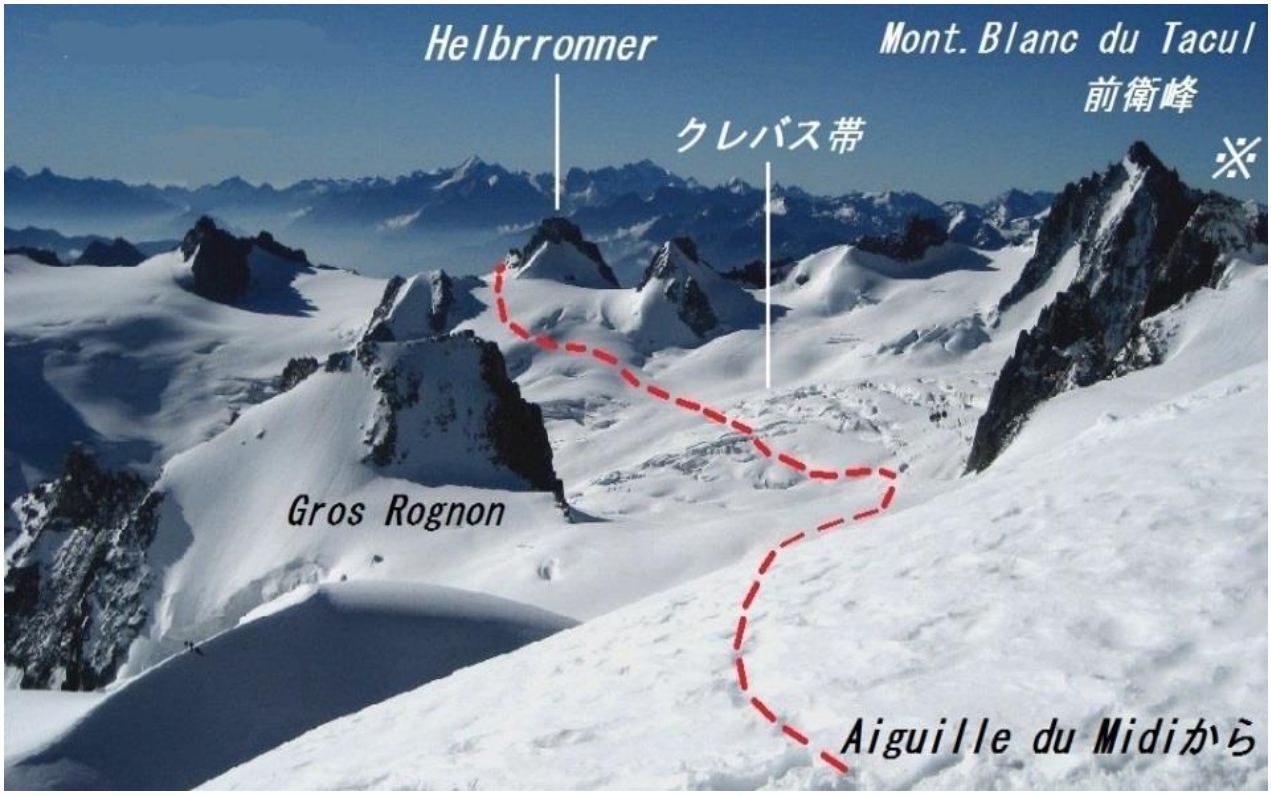
また、ヘリ・レスキュー保険は、未確認であるが、“Carte Neige”（カルト・ネージュ）という保険があり、現地で加入できるらしいが、我々は加入手続きをする時間的余裕が無かった。

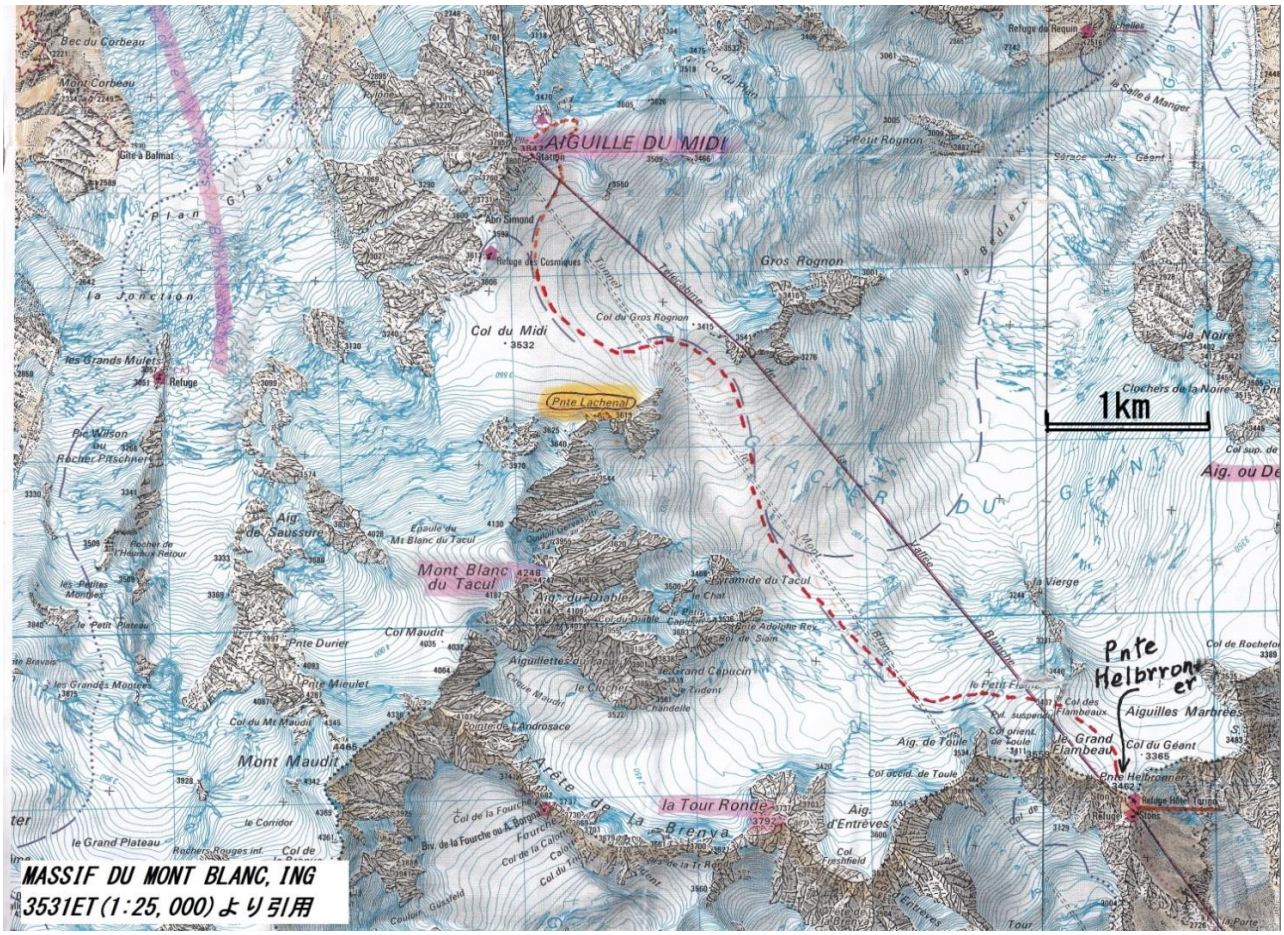
（７）ルート図

次ページにルート鳥瞰図、及び 2.5 万図幅ルート図を出しておく。これは私が既存資料を基に描いたものなので、或いは些細な誤謬があるかもしれないが、大凡はこのとおりと思われる。

但し、全て氷河上のルートであるからその年の氷河の流動状況、クレバスの状況によっては、多少はルートが異なっているかもしれない。

また、上でも述べたように、ルートは全て流動している氷河上であるから道標の類は一切無い。上空のパノラマ・ゴンドラが見えれば、ルートの指標にはなる。





（了）